

# 名詞述語文における「コト性」名詞のふるまい

佐藤 雄 一

## 0. はじめに

平成 21 年度全国学力・学習状況調査「中学校国語 A」で、以下の文の下線部を適切な表現に書き換える問題が出題された。

- (1) これは、レオナルド・ダ・ヴィンチが描いた「モナ・リザ」という絵です。この絵の特徴は、どの角度から見ても女性と目が合います。

この設問の正答率は 50.8%であった<sup>1</sup>。抽象名詞である「特徴」が主語であり、それに対応させる述語は「合います」という動詞ではなく、「合うことです」という形式名詞を用いた表現にしなければならないのだが、中学生の約半数が適切な表現に書き換えることができなかったということになる。

この種の主述の照合に関する問題は、現在も中学生の文章表現力における大きな課題の一つとなっており<sup>2</sup>、文章表現力という観点から誤用の背景を分析している研究もある<sup>3</sup>。

一方で、以下のように主語が抽象名詞であっても、「ことだ」という名詞述語を許容しない（許容度が低い）表現もある。

- (2) ?雲仙岳のマグマの性質は、ねばりけが強いことである。

本研究ノートでは、名詞述語文において抽象名詞がどのような構文的制約をもたらすのか、抽象名詞の性質と名詞述語文の種類という観点から検討を加える。

## 1. 考察の対象とする文について

抽象名詞を主語とし、「～ことだ」を述語とする文には以下の 2 種類が想定される。

- (3) この絵の特徴は、どこから見ても女性と目が合うことだ。  
(4) これらの特徴は、多くの患者に見られることだ。

本稿で考察の対象とするものは、(3)のように「こと」を修飾する部分（「どこから見ても女性と目が合う」）が抽象名詞（「特徴」）の内容を表している文を対象とし、以下、コトダ文と呼ぶことにする。述語に「～ことだ」が含まれていても、(4)のように「こと」を修飾する部分が主語である抽象名詞の属性を表している文については考察の対象としない。

## 2. 主語名詞について

### 2-1. 主語名詞のコト性——連体修飾節構造の観点から——

コトダ文の特徴として、主語名詞がモノではなくコトを表している点があげられる。コトダ文の主語となる名詞の特徴について、安部（2014）は「抽象名詞」の定義を厳密に規定することは困難であるとしながらも、暫定的な規定として寺村（1981）における「コト」を表す名詞としている（p. 79）。また、丹羽（2021）は、コトダ文における主語名詞と述語名詞「こと」を修飾する部分の統語関係について、内容補充関係にあるとしている（p. 27）。

そこで、名詞のコト性について、連体修飾構造における内容補充という観点から先行研究を確認しておく。

寺村（1993）は、連体修飾構造を修飾節中の述語と底の名詞との間に格関係があるか否かによって以下のように「内の関係」と「外の関係」に整理したうえで、「『ふつうの内容補充』的修飾を成り立たせるためには、底の名詞は、いわば『コト性』を持ったものでなければならぬ」（p. 202）と述べている。

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{「内の関係」付加的修飾} \\ \text{「外の関係」内容補充的修飾} \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} \text{ふつうの内容補充} \\ \text{相対的補充} \end{array} \right.$$

さらに、（ふつうの）内容補充については、名詞の内容を表す連体節を名詞に前節させる際、「トイウ」の介在が可能かどうかによって以下のような名詞の分類を行っている<sup>4</sup>。

表1 内容補充的修飾の分類

修飾部	名詞群	具体例	トイウ
内容補充	I. 発話性	言葉、手紙、返事、電報、申し出、噂、小言、不平、命令、誘い、依頼、	義務
	II. 思考性	意見、期待、思い、考え、想像、気持、決心、意志、信念	
	III. 「コト」 (内容節の独立性が低い)	話、事実、事、事件、騒ぎ、歴史、記憶、夢、過程、くだり、可能性、恐れ	任意
	IV. 「コト」 (内容節の独立性が高い)	癖、習慣、風習、運命、身の上、過去、経歴、商売、作業、仕事、技術、方法、準備、目的、資格、必要	
	V. 知覚性	音、匂い、味、様子、姿、絵、写真、場面、形	
相対補充	VI. 相対性	上、下、右、左、中、外、前、後、原因、理由、結果、一方、一面、ほか、半面、すき、途中、帰り、横、名残、最初、当日、前日、相手、…	不可
	VII. 相対性	悲しみ、淋しさ、落着かなさ、やさしさ、焦り、不安、怒り	

連体修飾節と底の名詞の間に「トイウ」の介在が義務的である「Ⅰ．発話性」, 「Ⅱ．思考性」の名詞群については, これらの名詞を主語としてその内容を述語とした(6)(8)のようなコトダ文を作ることはいできない。

「発話性」

- (5) 感染症の拡大でトイレトペーパーが不足するという噂
- (6) ?噂は感染症の拡大でトイレトペーパーが不足することだ。

「思考性」

- (7) どんなことでもできることは惜しみなく実行するという信念
- (8) ?信念はどんなことでもできることは惜しみなく実行することだ<sup>5</sup>。

連体修飾節と底の名詞の間に「トイウ」の介在が任意である「Ⅲ」と「Ⅳ」の名詞群については, コトダ文を作れるものと, 作れないものがある。

- (9) オリンピックで金メダルを取るという夢
- (10) 夢はオリンピックで金メダルを取ることだ。
- (11) どんな有名企業でも突然倒産することがあるという事実
- (12) ?事実はどんな有名企業でも突然倒産することがあることだ。
- (13) アメリカの大学で教えたという経歴
- (14) ?経歴はアメリカの大学で教えたことだ。
- (15) 書類や小包を配達するという仕事
- (16) 仕事は書類や小包を配達することだ。

一方, 「内容補充」であっても, 「トイウ」の介在が「不可」である「Ⅴ．知覚性」の名詞群はコトダ文を作ることができない。

- (17) ふたりで結婚を約束する場面
- (18) ?場面はふたりで結婚を約束することだ。

「相対補充」の名詞については, その多くが連体修飾節が底の名詞の内容を表すものではないため, コトダ文を作ることはいできない。

- (19) ペットを失った悲しさ
- (20) ?悲しさはペットを失ったことだ。

「ペットを失った」は「悲しさ」の内容ではなく、「悲しさ」の原因であるため相対補充とされる。

ただし、相対補充に分類されている「原因」「理由」については、いずれもコトダ文の主語となることが可能である。「理由」に関しては、「遅刻した理由」のような用法は相対補充であり、「トイウ」の介在は不可ということになるが、「電車が遅れたという理由」のような用法は内容補充であり、「トイウ」の介在が義務的になる。「原因」についても、「事故が起きた原因」のような相対補充の用例と、「組立にミスがあったという原因により設計・仕様どおりに製造されなかった～」（『現代日本語書き言葉均衡コーパス』以下 BCCWJ とする）のような内容補充に該当する用例が見られる。寺村（1993）の分類は、あくまで連体修飾構造のタイプを示したものであって、それぞれのタイプに属する名詞を網羅したものではない。

以上のことから、コトダ文の主語となれるのは内容補充の修飾部を取ることができる名詞の一部であるということになる。

## 2-2 主語名詞のコト性——「コトダ」の主語名詞の用例から——

宮田（2013）は、「～ことだ」の主語となる名詞を2年分の新聞記事データ（日外アソシエーツ「毎日新聞（データ集）2006・2009」）から抜き出し、次のように結論付けている。

- ・指定タイプの「～ことだ」文の主語名詞は、すべて「非飽和名詞」（パラメータの値が固定されない限りそれ単独では外延を定めることができない名詞）である。
- ・指定タイプの「～ことだ」文の主語名詞は、「非飽和名詞」のうち〈人〉〈物〉〈場所〉の属性を持つものを除いた部分集合として位置づけられる<sup>6</sup>。

また、安部（2014）は、抽象名詞を「 $\alpha$ 」（特徴、メリット、デメリット、決め手、目標、特色など）と「 $\beta$ 」（性質、生態、間柄、本能、流儀、民族性など）にわけ、それぞれ以下のような特徴を指摘している。

- ・ $\alpha$ タイプを含む「抽象名詞ハコトダ」は倒置指定文であり、 $\alpha$ タイプの抽象名詞は「抽象名詞ハコトダ」文において変項名詞句を形成する。
- ・ $\beta$ タイプを含む「抽象名詞ハコトダ」は倒置指定文の解釈が許容されず、不自然な文になる。内容を示す述語部分は属性としか捉えられず、 $\beta$ タイプの抽象名詞は変項名詞句を形成することができない。

宮田（2013）、安部（2014）ともにコトダ文の主語名詞の条件として、「非飽和名詞」であること、あるいは「変項名詞句」であることを挙げている。

西山 (2003) は、「主役」「作者」「表紙」のような例を挙げ、これらの名詞は「X の」というパラメータの値が定まらないかぎり外延を決めることができず、意味的に充足できていないとして「非飽和名詞」であるとしている (p. 33)。そして、「飽和名詞」か「非飽和名詞」かは純粋に意味論的なものであり、コンテキスト次第で「飽和名詞」になったり「非飽和名詞」になったりすることは考えにくいとしている (p. 38)。

一方、「変項名詞句」は、変項を埋める値をさがし、それを述語名詞によって指定するものである。西山 (2003) は「洋子の指導教授はあの人だ」という例文を挙げ、この文は「誰が (= どれが) 洋子の指導教授であるか」という問いに対する答えを「あのひと」で指定しているとし、「[x が洋子の指導教授である] を満たす x の値はあの人だ」という読み方をするとしている。このように倒置指定文「A は B だ」の A は「x が A である」という命題関数を表示しており、このような名詞句 A を西山 (2003) は「変項名詞句」と呼んでいる (pp. 75-76)。

「非飽和名詞」が純粋に意味論的なものであるのに対して、「変項名詞句」は指示性という機能面での捉え方という違いがあるが、「非飽和名詞」であれば「変項名詞句」として解釈されやすくなる。したがって、宮田 (2013) と安部 (2014) は、コトダ文の主語名詞について同様の指摘をしていると解釈できる。

### 2-3 コトダ文が作れない名詞について

安部 (2014) が「 $\beta$ タイプ」に分類した抽象名詞について考察する。安部 (2014) は、性質、生態、間柄、本能、流儀、民族性などの「 $\beta$ タイプ」の抽象名詞は、「変項名詞句」を形成することができないため「コトダ文」の主語となることはできないと述べている。しかし、述語を「というものだ」にし、「 $\beta$ タイプ」の抽象名詞の内容を述べることは可能である。

- (21) ? この物質の性質は、水とアルコールの両方に溶けることです。
- (22) ? この虫の生態は、年間 3 回の脱皮を行うことです。
- (23) ? 彼との間柄は、お互いにファーストネームで呼び合うことです。
- (24) ? レトリバーの本能は、ものを飼い主の所に持ってくることです。
- (25) ? 彼の流儀は、常に起源までさかのぼって考えることです。
- (26) ? 彼らの民族性は、海を渡ることを厭わないことです。
- (27) この物質の性質は、水とアルコールの両方に溶けるというものです。
- (28) この虫の生態は、年間 3 回の脱皮を行うというものです。
- (29) 彼との間柄は、お互いにファーストネームで呼び合うというものです。
- (30) レトリバーの本能は、ものを飼い主の所に持ってくるというものです。
- (31) 彼の流儀は、常に起源まで遡って考えるというものです。

(32) 彼らの民族性は、海を渡ることを厭わないというものです。

丹羽 (2021) は、このような「内容文」<sup>7</sup>において、述部に「というものだ」が用いられ、「ことだ」が用いられないものを次のように整理している。

- 疑問や意志のようなモダリティ要素を含む。
- 述部が長い複文である。
- 「環境」「状況」「事件」「事例」「トラブル」など主語名詞は指定関係（主語名詞のカテゴリーに該当するものとして、述語名詞を選択的・排他的に指定する述べ方）が想定しにくい。ただし、修飾語句（「必要な」「最も危険な」「今日の一番の」「最古の」「今の所の」など）によって「他の候補もあり得る中で Q を指定する」関係が成り立つ場合は、「コトダ」が可能である。
- 「コトダ」は、P の内容として複数の候補が想定される中で当該の Q を指定するという述べ方をする。補充疑問文「～は何か」に対応する。
- 「トイウモノダ」は P の内容がどのようなものか具体的に述べる。選択的な文脈があるかどうかは関係ない。補充疑問文「～はどのようなものか」に対応する。
- 「内容文」においてコトダ文は指定文と呼ぶにふさわしいが、トイウモノダ文は指定文と呼ぶにはふさわしくない。

補充疑問文に関する「ことだ」と「というものだ」の相違点（「～は何か」に対応するのか「～はどのようなものか」に対応するのか）は、安部 (2014) が述べている抽象名詞  $\alpha$  と  $\beta$  に対応しているといえる（ただし、丹羽 (2021) は「変項名詞句」という語は用いていない）。

コトダ文は倒置指定文であり、倒置指定文を「ある内包的な概念に対して、その外延を結びつける」（今田 (2008) p.18）ものとして捉えると、次の用例の不自然さ（と自然さ）の説明が可能になる。

(33) ? 惑星は水星である。

(34) 地球から最も近い惑星は、水星である。

「惑星は水星である」という文が倒置指定文として不自然なのは、内包的な概念である「惑星」の指示対象が膨大であり、外延が示しにくいからである。「地球から最も近い惑星は水星である」のように修飾語句によって範囲を限定すると外延を示すことが可能になり、倒置指定文として自然な文になる。

丹羽 (2021) が述べているように、指定関係が想定しにくい名詞（「環境」「状況」「事件」

「事例」「トラブル」など)は「表す範囲が漠然として広く、想定される候補の中から該当するものを指定するという述べ方になじみにくい」(p. 30)が、修飾語句によって範囲が限定され、外延を示すことが可能になると、コトダ文で指定関係を作ることが可能になるのである。

コトダ文の主語名詞になれない名詞は、コト性を有しつつも外延を示すことが難しい名詞であるということになる。

### 3. 述語として用いられるコト性名詞

安部 (2014) は、「抽象名詞ハ－コトダ」が不自然となる「 $\beta$ タイプ」の抽象名詞をさらに以下のように分類している。

- ・ $\beta$ －Ⅰタイプ：「コレガー抽象名詞ダ」が不自然になるもの（「性質」「生態」「間柄」など）
- ・ $\beta$ －Ⅱタイプ：「コレガー抽象名詞ダ」が自然になるもの（「本能」「流儀」「民族性」）

$\beta$ タイプの抽象名詞は指定文を作ることができないのであるから、 $\beta$ －Ⅰタイプが「コレガー抽象名詞ダ」という倒置指定文が作れないということについては、当然の結果である。一方、指定文を作れないにもかかわらず、「コレガー抽象名詞ダ」という文が作れる $\beta$ －Ⅱタイプの抽象名詞が存在する。 $\beta$ －Ⅱタイプの抽象名詞が作る「コレガー抽象名詞ダ」という文について、安部 (2014) は指定文ではなく提示文である可能性が考えられるとしつつも、先行研究で指摘されているこれまでの提示文とは別タイプの提示文である可能性がある (p. 85) としている。

本節では、「別タイプの提示文の可能性」について検討していくことにする。

#### 3-1 名詞の指示性からの分析

安部 (2014) は、「本能」「流儀」「民族性」などの名詞を例に挙げ、これらはコトダ文の主語にはなれないが、述語となって名詞述語文を作ることができることを示している<sup>8</sup>。

(35) ?レトリバーの本能は、ものを飼い主のところに持ってくることだ。

(36) これがレトリバーの本能だ。

そして、後者を「提示文の別タイプ」である可能性があると述べている。提示文という位置づけは、西山 (2003) によるものである。

西山 (2003) は名詞述語文を、以下のように分類している<sup>9</sup>。

表2 名詞述語文の分類

	「A は B だ」	「B が A だ」
1	措定文 「あいつは馬鹿だ」	
2	倒置指定文 「幹事は田中だ」	指定文 「田中が幹事だ」
3	倒置同定文 「こいつは山田村長の次男だ」	同定文 「山田村長の次男がこいつだ」
4	倒置同一性文 「ジキル博士はハイド氏だ」	同一性文 「ハイド氏がジキル博士だ」
5	定義文 「眼科医（と）は目のお医者さんのことだ」	
6		提示文 「特におすすめなのがこのワインです」

(p.122)

この表からわかる通り、「B が A だ」という形式を「A は B だ」に置き換えられない表現は「提示文」のみということになる。

提示文について西山（2003）は、「特におすすめなのがこのメニューです」という文をあげ、「B が A だ」の形式をとる指定文や同定文、同一性文のいずれにも該当しないことを次のように指摘している。

- ・「このメニュー」は変項名詞句ではなく、指示的であるため、指定文ではない。
- ・「このメニューとはそもそも何か」という同定に答えるものではないため、同定文ではない。
- ・「このメニュー」の指示対象が、「特におすすめなの」の指示対象と同一だと言っているわけではないため、同一性文ではない。

そのうえで、西山（2003）は、熊本（2000）の「提示機能」という観点を支持し、問題となっているタイプの文を提示文として位置づけている。熊本（2000）は、ある要素を談話に導入する談話機能を有し、文末に大切な要素が来ることを予告させることによる際立ちを持つ文を提示文としている（pp.103-104）。

「特におすすめなのがこのメニューです」のような提示文は述語に際立ちがあるのに対して、「 $\beta$ -IIタイプ」の文（「これがレトリバーの本能だ」）は、主語に際立ちがあるように解釈できることから、安部（2014）は「提示文の別タイプ」の可能性を示唆しているのである<sup>10</sup>。

抽象名詞がコトダ文を作れるか否かという点については、「変項名詞句」という概念が有効であった。確かに、指定文、措定文といった、名詞述語文において比較的使用頻度が高い文においては、「変項名詞句」「指示名詞句」「叙述名詞句」といった意味機能（名詞の指示



性)に基づく分析が有効に機能しているが、提示文については、「指示名詞句」「変項名詞句」といった名詞句の意味機能の観点からの分析ではなく、「提示」という談話機能の観点を導入する必要があるということになる。この点については、西山(2003)も「提示機能と『変項名詞句の値を埋める』という意味機能とは独立のものである」(p.179)と述べている。

「 $\beta$ -IIタイプ」の文を「提示文の別タイプ」をして位置づけることが可能であったとしても、それはあくまでも談話機能的な位置づけということになる。

コトダ文の主語になれる名詞については、「変項名詞句」という指示性の観点からその特徴を説明することが可能であっても、コトダ文の主語にはなれない名詞が述語になれるのはなぜかという点については、名詞句の指示性という観点からの説明は困難であり、談話機能でしか説明できないとすると、「コト性」名詞(抽象名詞)の構文的な制約が生じる本質的な問題の解明にはならないのではないだろうか。

仮に提示文としての位置づけが可能であるなら、提示文の典型的な話題の引継ぎと、「別タイプ」の話題の引継ぎがどのように異なるのか、具体的な例に基づいて考察する必要があると思われるが、この点については別稿に譲ることとする。

### 3-2 名詞の意味変化からのアプローチ

杉浦(2019)は、以下の用例をあげ、文末に用いられた非指示名詞句が義務的モダリティの意味を持ちうることを指摘している。

- (37) 遅れを解消する(の/こと)が急務だ。
- (38) 向こうと手を組むのが得策だ。
- (39) ?急務は遅れを解消することだ。
- (40) ?得策は向こうと手を組むことだ。
- (41) [遅れを解消する]{のが望ましい/べきだ}
- (42) [向こうと手を組む]{のが望ましい/べきだ}

(37)(38)のように「急務」「得策」は、述語名詞として用いられることはあるが、(39)(40)のように主語名詞となってコトダ文を作ることとはできない。そして、これらが述語名詞として用いられた場合は、(41)(42)のように「義務的モダリティ」を表す「のが望ましい/べきだ」と同じような働きをしているというのが杉浦(2019)の主張である。

「急務」「得策」などの名詞は、コトダ文は作れないが、「～の/ことがNだ」といえる(指定文の形式はつくれる)という点で、安部(2014)が「 $\alpha$ II」タイプとした名詞群と共通点を持っているように見える。杉浦(2019)が述べているように、これらの名詞が「指示名詞句」としては用いられにくいことから、「～ことがNだ」という形式であっても、これを指定文にとらえることはできない。

杉浦（2019）と安部（2014）の指摘には構文的特徴に類似点が見られるものの、例文として挙げられている名詞に共通点は見いだせない。杉浦（2019）があげている名詞は、「原則」「基本」「常識」「筋」「正解」「マナー」「理想」「礼儀」「エチケット」であり、杉浦（2019）はこれらを「義務的」な意味を有するモダリティに意味変化を起こしていると解釈している。

それに対して、安部（2014）があげている名詞は「本能」「流儀」「民族性」であり、「義務的」な意味を有していると解釈することは難しく、したがって義務的モダリティに変化しているというとらえ方にも無理がある。

杉浦（2019）があげている「急務」「得策」が（39）（40）のように指示的には使われにくい（コトダ文が作りにくい）というのはその通りだろうが、修飾語を補うことによって範囲を限定すれば、指示的に使われることが可能になる場合もある<sup>11</sup>。

（43） 国際社会の急務は分断を解消することだ。

（44） 社会にとっての得策は専門家に判断をゆだねることだ。

その他、杉浦（2019）が挙げている「原則」「基本」「常識」「マナー」「理想」などもBCCWJには以下のような用例が見られる。

（45） 下肢静脈りゅうの治療の原則は下腿の静脈血のうっ滞を取り除くことです。

（46） 眠るときの冷え対策の基本は、首まわりをしっかりとガードすること。

（47） 静脈産業の常識は動脈産業の逆で「より単純なものを多量に集めるほど価値が高いこと」である。

（48） 成熟した女性のマナーはその場にふさわしい装いをすることです。

（49） 理想は、軽量のフリースやポリエステル系の衣類を薄く重ねて着ること。

安部（2014）、杉浦（2019）が例として挙げた名詞がコトダ文の主語となれるか、「～の／ことがNだ」の述語となれるかをBCCWJで確認したものが、表3である<sup>12</sup>。

表 3 コト性名詞が主述に用いられる用例数

N	N はコトダ	～ノ・コト が N だ	N	N はコトダ	～ノ・コト が N だ
性質	0	3	基本	81	273
生態	0	0	常識	2	167
間柄	0	0	理想	9	128
本能	0	7	筋	0	72
流儀	0	12	礼儀	0	56
民族性	0	0	エチケット	0	7
急務	2	34	正解	1	57
得策	0	50	マナー	1	56
原則	17	257			

「性質」「生態」「間柄」「本能」「流儀」「民族性」「得策」「筋」「礼儀」「エチケット」を主語としたコトダ文の用例を BCCWJ に見出すことはできなかった。

ただし、「原則」「基本」「常識」「正解」「マナー」「理想」については、上記の用例のように、数は限られているもののコトダ文の用例が見られる。

杉浦 (2019) が指摘するように、倒置指定文の主題としても用いられる名詞（したがって、指定文の述語として用いられることも可能な名詞）が、「義務的モダリティ」として用いられていることがうかがえる。用例数から判断すると、コトダ文としての用例が限られていること（「義務的モダリティ」として用いられるよう例のほうが多いこと）から、主語としての使いにくさ（コトダ文が作りにくいこと）、逆に言えば、「～の／ことが N だ」のように述語としてなら使えることが「義務的モダリティ」化を生んでいるという解釈もできる。

一方、「性質」「流儀」などについては、何らかの「モダリティ」化が進んでいるという解釈は困難であることから、倒置指定文の主語としても用いられる名詞がモダリティ化しているのはごく一部であると言える。

### 3-3 用例からの考察

宮田 (2013)、丹羽 (2021) は、コトダ文の主語になりやすい名詞、トイウモノダ文の主語になりやすい名詞をリストとして提示している。前者については宮田 (2013) が 133 語、丹羽 (2021) が 124 語、後者については宮田 (2013) が 28 語、丹羽 (2021) が 63 語である。重複する語を除くと、コトダ文の主語になりやすい名詞 229 語、トイウモノダ文の主語になりやすい名詞 89 語が提示されていることになる。

トイウモノダ文の主語になりやすい名詞のいくつかは、「～のが N だ」（あるいは「～というのが N だ」）という形式で名詞の内容補充を表す表現が可能となっている<sup>13</sup>。以下の用

例はいずれも BCCWJ からのものである。

- (50) その事実は、本邦通貨を外国に無許可で持ち出したというものでございます。
- (51) 生活習慣の変化で胃がんになる人自体が減っているのが事実だ。
- (52) そのやり方は、薄いコットンを水で濡らしてから化粧水をしみ込ませ、顔に張ってしばらく浸透させるというものです。
- (53) 利用できるものは、徹底して利用するのが、やつのやり方だ。
- (54) その仕組みは、住宅の必要な場所に取り付けたセンサーが異常を察知すると、セムのコントロールセンターに信号を送り、対処するというものです。
- (55) ひたすら魅力をたたえる情報が溢れるのが世の中の仕組みです。

丹羽（2021）は内容補充を表す文においては、「～ことだ」によって指定文として内容を表現する形式と、「～というものだ」によってその内容がどのようなものであるかを表現する形式があることを指摘しているが、さらに、「～のがNだ」という形式によって述語名詞の内容を主語として表現する形式があることになる。トイウモノダ文と「～のがNだ」はともに指定文（倒置指定文）ではないという点で関連があるものと思われる。

#### 4. おわりに

先行研究の知見も含め、以下のことが明らかになった。

コトダ文の主語は、コト性を持つ名詞（すなわち、内容節による連体修飾が可能）で、外延を示すことが可能な名詞である。名詞の指示性という意味機能の観点から、これを「変項名詞句」とであるという示し方もできるが、名詞述語文の構造を包括的にとらえる観点としては、なお検討の余地が残されていると思われる。

コトダ文の主語にならない名詞は、コト性を有していても（内容節による連体修飾は可能であっても）、外延を示すことができない名詞である。これらの名詞は修飾表現によって外延を限定することができれば、コトダ文を作ることが可能なものもある。

また、コトダ文が作れない名詞であっても、述語を「～というものだ」形式にすることによって、内容補充を述語とする表現が可能になるものもある。これらの名詞の中には内容補充を主語として「～のがNだ」と言えるものがある。さらに、「～のがNだ」という文においては、述語名詞が義務的モダリティ化していると解釈されるものがある。

「～のがNだ」は、別タイプの提示文という可能性も示唆されているが、従来の提示文とされているものと談話機能の面でどのような違いが見られるのかという分析と合わせて談話機能以外の観点からの考察も必要である。

「コト性」名詞を主語とした名詞述語文においては、「特徴」がコトダ文を作ることができ

るのに対して、「性質」は排他的な選択ができるような修飾表現を伴わなければコトダ文は作れないというように、類語間でコトダ文が作れるか否かに違いが生じる。「はじめに」で述べた「モノリザ文」が生じる要因の一つが、コト性名詞のこのような特徴にあるものと思われる。

本稿でのコーパスを用いた分析は、先行研究にあげられた語彙の一部にとどまっており、より多くの用例を検討することで語彙の特徴や他のタイプの名詞述語文との関連が見えてくるものと思われる。今後の課題としたい。

#### 〈注〉

- 1 「国立教育政策研究所」  
[https://www.nier.go.jp/09chousa/09mondai\\_chuu\\_kokugo\\_a.pdf](https://www.nier.go.jp/09chousa/09mondai_chuu_kokugo_a.pdf) および  
[https://www.nier.go.jp/09chousakekkahoukoku/09chuu\\_data/shiryou/02\\_chuu\\_kyouka\\_chousakekka.pdf](https://www.nier.go.jp/09chousakekkahoukoku/09chuu_data/shiryou/02_chuu_kyouka_chousakekka.pdf)
- 2 松崎史周 (2015) など
- 3 伊坂淳一 (2012) など
- 4 寺村 (1981) が述べた内容を金 (1989) が表として整理したものの一部筆者が追記したものである。
- 5 宮田 (2013) の「ことだ」を述語にとる主語名詞のリストには「信条」があげられている。寺村 (1981) の「思考性」に分類できるのは難しいところ。「習慣」は修飾語によって範囲を限定し外延を示すことができれば、自然な表現となる (「祖父の習慣は朝食の前に公園を散歩することだ」)。宮田 (2013) の「ことだ」を述語とすることができる名詞のリストには「日課」が含まれている。
- 6 〈人〉〈物〉〈場所〉の属性を持つ「非飽和名詞」を主語とした指定タイプの文は、以下の用例のように述語が人や物、場所を表す名詞として表現されるため、「～ことだ」の形式にはならない。
  - ・源氏物語の作者は、紫式部である。
  - ・ダビンチの作品は、「モノリザ」だ。
  - ・カキ料理の本場は、広島だ。
 〈人〉〈物〉〈場所〉の属性を持つ名詞が、指定タイプの「～ことだ」文の主語名詞にならないということは、逆に指定タイプの「～ことだ」文の主語名詞はコト性を有している必要があるということになる。
- 7 丹羽 (2021) は「PハQモノダ」「PハQコトダ」という文において「モノ」「コト」とQが内容補充の関係にあるものを「内容文」としている。
- 8 安部 (2014) は、「性質」「生態」「間柄」を $\beta$ Ⅱタイプとし、「これが～だ」という表現が不自然になると述べている。「生態」「間柄」についてはBCCWJには該当するよう例は見られなかったが、「性質」については、以下のような用例が見られた。
  - ・ああしたことに首を突っ込めば、何らかのツケがまわってこないはずはない。たとえば納屋の裏へまわったとたん、それまで飛んでくことに気づきもしなかったプーメランがとつじょ顔にぶち当たる、というような。思うに、それが世界の性質なのである。 (LBe9\_00134)
  - ・美しいものは、諸君らを黙らせませす。美には、人を沈黙させる力があるのです。これが美も持つ根本の力であり、根本の性質です。 (OY14\_20853)
- 9 西山 (2003) は、「名詞述語文」ではなく「コピュラ文」としている。

- 10 熊本（2000）の提示文も安部（2014）が示唆する「別タイプの提示文」も、「際立ち」がある点を指摘しているが、ここでいう「際立ち」は指定文にみられる変項名詞句のように項を埋めるような際立ち方ではない。
- 11 「急務は～ことだ」はBCCWJに2例ある。「得策は～ことだ」はBCCWJに用例はなく、筆者の作例。
- 12 「こと」「の」の数には「ということ」「というの」も含まれているが、それほど多くはない。
- 13 BCCWJにおいて「～のが名詞だ」（「のが」の直後に名詞が来る例）、「～のが～の名詞だ」（「のが」から3語に名詞が来る例）を検索したところ、宮田（2013）、丹羽（2021）が提示したトイウモノダ文の主語になりやすい名詞89語のうち「～のが名詞だ」の形で文を作れる名詞は55語であった。55語のうち内容補充の関係で用いられている例があるものは43語であった。

#### 参考文献

- 安部朋世（2014）「抽象名詞の内容を表す『抽象名詞ハーコトダ』文」『日本語文法学会第15回大会発表予稿集』
- 伊坂淳一（2012）「中学生の日本語表現における文法的不適格性の分析」『千葉大学教育学部研究紀要』60 千葉大学
- 今田水穂（2008）「日本語名詞述語文の記述的分類の再分析」『筑波応用言語学研究』15号 筑波大学大学院 博士課程 人文社会科学研究科 文芸・言語専攻 応用言語学領域
- 金 銀淑（1989）「連体修飾構造における『トイウ』の意味機能」『国語学研究』29号 東北大学文学部国語学研究刊行会
- 金水 敏（2015）「『変項名詞句』の意味解釈について」『日中言語研究と日本語教育』好文出版
- 熊本千明（2000）「指定文と提示文——日・英語の観察から——」『研究論文集』5（1） 佐賀大学文化教育学部
- 杉浦滋子（2019）「コト的な内容をもつ名詞の意味変化」『言語と文明』17号 麗澤大学大学院言語教育研究科
- 寺村秀夫（1981）『日本語の文法（下）』国立国語研究所
- 寺村秀夫（1993）『寺村秀夫論文集Ⅰ』くろしお出版
- 西山祐司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論——指示的名詞句と非指示的名詞句——』ひつじ書房
- 丹羽哲也（2021）「名詞述語文としてのモノダ文とコトダ文」『文学史研究』61号 大阪市立大学国語国文学研究室
- 松崎史周（2015）「中学生の作文に見られる「主述の不具合」の分析：出現傾向から学習者の表現特性を探る」『解釈』61（5・6） 解釈学会
- 宮田公治（2013）「指定タイプの『～ことだ』文の主語となる名詞」『松蔭大学紀要』16号 松蔭大学

## Abstract Nouns in Copular Sentences

Yuichi Sato

In this research note, the following points regarding abstract nouns in copular sentences were confirmed based on previous studies. The abstract nouns mentioned here are nouns that can be accompanied by content clauses. There are at least two types of abstract nouns used in copular sentences. One is that the predicate must be “-kotoda” and the other is that the predicate cannot be “-kotoda”. The former abstract nouns can make specificational sentences. Since these abstract nouns can make specificational sentences, they can be the subject or predicate of copular sentences. The latter abstract nouns cannot make specificational sentences, but the content of the abstract nouns can be expressed by the predicate “-toiumonoda”. There are some abstract nouns that can be the predicate after “ga”, even though it is not possible to make specificational sentences as the subject. Previous studies have analyzed sentences containing this special type of abstract nouns from the perspective of discourse function, but other possibilities should be considered.